

J.LEAGUE

J STATS REPORT 2025 Q2

※J 1とJ 2は第19節、J 3は第16節終了時点のデータを使用（J 1は2025年6月15日時点で未開催の試合を除く）

データで選ぶベストイレブン

J STATSを基に選出した第19節終了時点でのJ1ベストイレブンを紹介する。ポジションごとに複数の評価テーマと関連するスタッツを定めてスコアを算出し、評価テーマごとの重要度を掛け合わせたトータルスコアの高い順に選出している。対象選手は、各ポジションで第19節までに10試合以上に先発出場した選手とする。



なお、このスコアはあくまで対象選手内の傑出度を測るためであり、選手の優劣をつけたり、異なるポジションの選手と比較したりするものではない。

GK		CB		SB/WB	
					
早川 友基 鹿島アントラーズ		荒木 隼人 サンフレッチェ広島		久保 藤次郎 柏レイソル	
トータルスコア 549		トータルスコア 537		トータルスコア 567	
失点期待値（被シュートのゴール期待値）合計21.6に対して15失点に抑えており、差分のプラス6.6はリーグ1位。また、対象選手内でバイパス数2位かつ前方パス成功率が平均以上となっており、中長距離のパスの量と質で攻撃にも大きく貢献した。		自陣では空中戦勝利数でリーグ1位の66回を記録し、跳ね返す力で安心感をもたらした。さらに対象選手内で最多のシュート数21本と最多タイの3ゴールを記録するなど、相手陣では脅威を与える存在となった。		「ゴール数+アシスト数」で対象選手内で最多タイとなる5（2ゴール、3アシスト）、シュート数も同最多の29本を記録。さらに走行距離209.8km、スプリント回数387回はともにリーグ3位と、運動量でも際立っていた。	
		PA内クリア数67回、シュートブロック数16回はともにリーグ3位。失点の危機からチームを救うだけでなく、攻撃面でもバイパス数でリーグ2位の1820を記録するなど、攻守両面でのハイレベルな貢献が数値に表れている。		シュートブロック数9回は対象選手内でトップ、クリア数51回は同2位と守備面で高いパフォーマンスを発揮してチームに貢献。特筆すべきはデュエル勝利数で、対象選手の平均44回を大幅に上回る105回を記録した。	

※サイドバックとウイングバックは同ポジションとして扱う

MF		MF	
			
ルカス フェルナンデス セレッソ大阪		稲垣 祥 名古屋グランパス	
トータルスコア 608		トータルスコア 606	
第19節終了時点で11アシストを記録し、自身がアシスト王となった昨シーズンの10アシストを既に上回った。第13節から第16節にかけては4試合連続の計5アシストを記録するなど、驚異的な活躍が続けている。		MFの5つの評価テーマのうち「得点への関与」「デュエル」「運動量」の3つでトップ評価を獲得する万能ぶりを披露。対象選手内でトップの7ゴール、地上戦デュエル勝利数73回および走行距離229.8kmはリーグ全体でトップと非の打ち所がない。さらに、MF登録選手の中で唯一全試合フルタイム出場を続けている選手でもある。	
		ともにリーグ2位となるラストパス数38本とスループス成功数31本を記録するなど、多くのチャンスを演出してチームに貢献した。また、対象選手内でトップのスプリント回数328回と強度の高さも光る。	
		シュート数45本は対象選手内でトップ、4ゴールと4アシストはともに同3位タイ。走行距離とスプリント回数でも対象選手内でトップ10に入っており、豊富な運動量を活かして攻撃面でチームを牽引した。	

※ウイングの選手はミッドフィールダーに含める

CF	CF
	
レオ セアラ 鹿島アントラーズ	鈴木 優磨 鹿島アントラーズ
トータルスコア 569	トータルスコア 509
第11節から第13節は出場しなかったものの、その後の5試合で3得点を積み重ねて得点ランキング単独トップの11ゴール。シュートのゴール期待値合計5.7に対しての差分は+5.3と、決定力の高さを見せつけた。	ヘディングクリア数21回はFW登録選手の中で1位、被ファウル数44回はリーグ2位、バイパス受け数1543でもリーグ6位。直接ゴールに関わるスタッツではないが、多彩な役割をハイレベルにこなすことでチームに貢献している。

ポジション	評価テーマ	関連スタッツ	評価スコア	上位3選手
GK	セーブ力	被シュートの失点期待値 被シュートによる失点数	70.3	早川 友基 (鹿島)
			65.4	小島 亨介 (柏)
			63.0	福井 光輝 (G大阪)
	クロス対応	クロスキャッチ数 PA外からの被クロスキャッチ率	73.2	上福元 直人 (湘南)
			65.7	太田 岳志 (京都)
			64.4	市川 暉記 (横浜FC)
	攻撃への関与	シュートパス成功数 バイパス数 前方パス成功率	61.8	早川 友基 (鹿島)
			59.8	小島 亨介 (柏)
			58.9	福井 光輝 (G大阪)
CB	危機回避	PA内クリア数、PA外クリア数 シュートブロック数、クロスブロック数	64.0	太田 岳志 (京都)
			60.8	一森 純 (G大阪)
			58.5	スベンド ブローダーセン (岡山)
	空中戦	自陣空中戦勝利数 自陣PA内空中戦勝利数 自陣空中戦勝率	72.3	鈴木 義宜 (京都)
			67.6	古賀 太陽 (柏)
			64.6	畠中 横之輔 (C大阪)
	ボール奪取	DTタックル奪取数 DTタックル奪取率	69.3	植田 直通 (鹿島)
			66.2	荒木 隼人 (広島)
			63.0	安藤 智哉 (福岡)
	攻撃への関与	バイパス数 キャリア数	72.8	住吉 ジェラニレション (清水)
			65.9	稲村 隼翔 (新潟)
			64.5	佐々木 翔 (広島)
SB/WB	得点への関与	ゴール数 アシスト数 シュート数	77.9	鈴木 淳之介 (湘南)
			71.0	鈴木 雄斗 (湘南)
			67.4	古賀 太陽 (柏)
	攻撃への関与	バイパス数 クロス数 ドリブル成功数	80.2	荒木 隼人 (広島)
			76.4	網島 悠斗 (東京V)
			71.9	マテウス トゥーレル (神戸)
	守備への関与	クリア数 シュートブロック数 クロスブロック数	65.4	畑 大雅 (湘南)
			65.4	佐々木 旭 (川崎F)
			63.7	安西 幸輝 (鹿島)
	デュエル	デュエル勝利数 デュエル勝率	71.7	藤原 奏哉 (新潟)
			70.9	半田 陸 (G大阪)
			62.2	佐藤 響 (京都)
MF	運動量	走行距離 スプリント回数	75.4	半田 陸 (G大阪)
			68.7	藤原 奏哉 (新潟)
			58.3	中山 雄太 (町田)
	得点への関与	ゴール数 アシスト数 シュート数	81.6	久保 藤次郎 (柏)
			70.7	新井 悠太 (東京V)
			64.9	黒川 圭介 (G大阪)
	守備への関与	ミドルプレス数 ミドルプレスによるコンタクト数 こぼれ球奪取数	69.4	久保 藤次郎 (柏)
			66.9	畑 大雅 (湘南)
			65.9	須貝 英大 (京都)
	チャンスメーク	PA内へのパス成功数 ラストパス数	78.1	稲垣 祥 (名古屋)
			75.8	ルucas フェルナンデス (G大阪)
			74.7	北野 颯太 (C大阪)
CF	デュエル	デュエル勝利数 デュエル勝率	72.2	川辺 駿 (広島)
			67.2	稲垣 祥 (名古屋)
			67.0	見木 友哉 (福岡)
	守備への関与	プレスバック数 ATタックル数、ATブロック数 クリア数	92.0	ルucas フェルナンデス (G大阪)
			74.5	マテウス サヴィオ (浦和)
			73.9	相馬 勇紀 (町田)
	決定力	ゴール数とゴール期待値の差分	75.2	稲垣 祥 (名古屋)
			72.4	原 大智 (京都)
			69.9	ユーリ ララ (横浜FC)
	攻撃の起点	バイパス受け数 相手陣空中戦勝率	65.9	稲垣 祥 (名古屋)
			65.2	マテウス サヴィオ (浦和)
			64.4	北野 颯太 (C大阪)
	脅威となるアクション	裏抜け数 被ファウル数 被ファウルによるPK獲得数	70.7	レオ セアラ (鹿島)
			64.6	ラファエル エリアス (京都)
			63.4	ラファエル ハットン (C大阪)

※DT:ディフェンシブサード、MT:ミドルサード、AT:アタッキングサード ※PA:ペナルティエリア



アクチュアルプレーイングタイム (APT) ACTUAL PLAYING TIME

● 各リーグの APT の昨年比

シーズン	リーグ・アン J1 LEAGUE	プレミアリーグ J2 LEAGUE	ブンデスリーガ J3 LEAGUE
2025	53:33 (53.6%)	52:23 (53.1%)	51:13 (52.2%)
2024	52:24 (52.5%)	50:46 (51.6%)	51:54 (53.2%)

※括弧内は「APT÷試合時間」

※2024 シーズン、2025 シーズンともに J 1 と J 2 は第 19 節、
J 3 は第 16 節までのデータ

▶ アクチュアルプレーイングタイムについて 2024 シーズンの同時期と比較すると、J 1 はプラス 1 分 9 秒、J 2 はプラス 1 分 37 秒、J 3 はマイナス 41 秒となった。Q1 (第 9 節まで) と同じく、J 1 と J 2 は増加、J 3 は減少傾向となっている。

チーム別に見ると、全チームの中で最もアクチュアルプレーイングタイムが伸びているのは、Q1 に続いて柏レイソルでプラス 6 分 12 秒。J 2 で最も伸びているのは水戸ホーリーホックのプラス 4 分 4 秒。J 3 では奈良が唯一 3 分以上伸びて 55 分台となっている。

● 各チームの APT の昨年比

※2024 シーズン、2025 シーズンともに J 1 と J 2 は第 19 節、J 3 は第 16 節終了時点のデータ

チーム	2025	2024	昨年比
鹿島	50:13	51:45	-1:32
浦和	56:33	57:58	-1:25
柏	58:00	51:48	6:12
FC東京	54:22	51:45	2:37
東京V	53:39	53:39	0:00
町田	51:09	49:17	1:52
川崎F	55:15	53:18	1:57
横浜FM	55:56	52:38	3:18
横浜FC	52:37	51:06	1:31
湘南	54:57	49:46	5:11
新潟	58:59	57:01	1:58
清水	53:33	54:19	-0:46
名古屋	51:38	51:56	-0:18
京都	48:13	46:42	1:31
G大阪	56:28	54:47	1:41
C大阪	56:37	53:15	3:22
神戸	48:12	49:51	-1:39
岡山	49:15	48:30	0:45
広島	53:33	48:50	4:43
福岡	51:50	52:17	-0:27

チーム	2025	2024	昨年比
札幌	52:00	55:21	-3:21
仙台	53:21	53:23	-0:02
秋田	46:03	42:28	3:35
山形	54:11	52:56	1:15
いわき	46:33	45:59	0:34
水戸	54:01	49:57	4:04
大宮	49:58	51:30	-1:32
千葉	52:14	50:01	2:13
甲府	54:35	52:21	2:14
富山	53:41	52:45	0:56
磐田	53:09	52:04	1:05
藤枝	49:31	53:06	-3:35
山口	50:14	47:22	2:52
徳島	53:42	53:03	0:39
愛媛	53:38	49:41	3:57
今治	50:18	50:19	-0:01
鳥栖	55:04	54:01	1:03
長崎	57:03	56:10	0:53
熊本	56:53	53:58	2:55
大分	51:11	48:35	2:36

チーム	2025	2024	昨年比
八戸	49:59	51:30	-1:31
福島	54:02	54:05	-0:03
栃木SC	50:01	50:21	-0:20
栃木C	49:38	-	-
群馬	53:07	52:09	0:58
相模原	52:02	51:46	0:16
松本	51:29	49:04	2:25
長野	52:35	55:00	-2:25
金沢	51:37	51:41	-0:04
沼津	50:35	55:29	-4:54
岐阜	51:32	51:54	-0:22
FC大阪	45:46	43:43	2:03
奈良	55:44	51:55	3:49
鳥取	53:14	54:34	-1:20
讃岐	51:06	51:09	-0:03
高知	46:08	-	-
北九州	52:43	50:56	1:47
宮崎	51:33	53:48	-2:15
鹿児島	50:45	50:24	0:21
琉球	50:41	54:09	-3:28

● 欧州 5 大リーグとの APT 比較 ※データ提供:SkillCorner

シーズン	リーグ・アン	プレミアリーグ	ブンデスリーガ	セリエ A	ラ・リーガ	J 1 リーグ
2022 ※欧州は 2021-22	50.2	49.8	48.3	48.7	47.2	48.0
2023 ※欧州は 2022-23	50.3	48.7	48.0	48.9	47.5	47.1
2024 ※欧州は 2023-24	51.1	51.7	50.9	49.4	48.6	46.4
2025 ※欧州は 2024-25	51.6	50.2	50.1	48.9	48.4	47.6

※欧州 5 大リーグであるプレミアリーグ(イングランド)、ラ・リーガ(スペイン)、ブンデスリーガ(ドイツ)、セリエ A (イタリア)、リーグ・アン(フランス)と J 1 リーグの APT を比較するため、ここでは J 1 リーグのデータも外部ソース(データ提供:SkillCorner)を利用

※ボールインプレータイム(単位:分):ボールがインプレーとなっている時間(SkillCorner 定義)

※2024 シーズン、2025 シーズンともに J 1 と J 2 は第 19 節、J 3 は第 16 節終了時点のデータ

▶ 2025 シーズンの J 1 リーグはシーズン途中のデータであるものの、3 シーズン連続で最も短い結果となっている。2024 シーズンは最も長いプレミアリーグと約 5 分の差、2025 シーズンは最も長いリーグ・アンとは約 4 分の差となっている。



アウトオブプレータイム OUT OF PLAY TIME

● J 1 アウトオブプレータイム内訳の昨年比(単位:分) ※1試合平均

シーズン	統計	セットプレーのリスタート時間						その他
		FK	スローイン	GK	CK	得点→KO	PK	
2025	46.4 (-1.5)	15.9 (-1.2)	11.6 (+1.0)	7.5 (-0.2)	6.1 (-0.6)	2.8 (-0.4)	0.5 (-0.4)	2.0 (+0.3)
2024	47.9	17.1	10.6	7.7	6.7	3.2	0.9	1.7

※セットプレーのリスタート時間は、アウトオブプレーになってから再開するまでの時間。これらのリスタート時間にはVARや交代、怪我人の治療、飲水タイムも含まれる。

※得点→KO:得点後にキックオフで再開されるまでの時間

※ 2024シーズン、2025シーズンともに第19節終了時点のデータ

● J 1 セットプレー件数の昨年比 ※1試合平均

シーズン	FK	スローイン	GK	CK	得点→KO	PK
2025	24.8 (-2.6)	47.7 (+3.1)	16.0 (-1.4)	9.4 (-1.2)	2.3 (-0.3)	0.2 (-0.1)
2024	27.4	44.6	17.4	10.6	2.6	0.3

※ 2024シーズン、2025シーズンともに第19節終了時点のデータ

▶ 続いて、J 1 のアウトオブプレータイムについて2024シーズンの同時期と比較する。アクチュアルプレーイングタイムが伸びていることに伴い、アウトオブプレータイムは1.5分減少している。

内訳を見ると、フリーキックのリスタート時間がマイナス1.2分、その他もスローイン以外は短くなっている。1試合平均件数も同じ傾向となっており、スローイン以外のすべての項目で減っている。Q1(第9節まで)と同じく、件数の減少がそのままリスタート時間の短縮に繋がっていると考えられる。

一方で、スローインにかかる時間は2024シーズンよりも1.0分伸びている。スローインの1試合平均本数がプラス3.1本(Q1ではプラス2.0本)と増えていることが影響している。なおロングスローのリスタート時間と件数は、2024シーズンと同水準となっており、ロングスロー以外のスローインにかかる時間が増えている結果となった。

● J 1 チーム別のセットプレーリスタート時間の昨年比(単位:秒) ※1回あたりの平均時間

チーム	FK			CK			スローイン			GK		
	2025	2024	昨年比	2025	2024	昨年比	2025	2024	昨年比	2025	2024	昨年比
鹿島	44.8	38.9	5.9	42.5	41.0	1.6	17.0	14.0	3.0	32.8	26.9	5.9
浦和	38.5	31.2	7.3	40.7	36.3	4.4	14.5	12.7	1.8	30.0	22.3	7.7
柏	33.5	40.5	-6.9	26.6	35.8	-9.2	12.9	14.2	-1.2	18.2	25.7	-7.4
FC東京	41.0	36.4	4.5	38.3	41.3	-3.0	14.2	13.8	0.4	26.9	22.7	4.2
東京V	39.2	39.5	-0.2	41.6	38.9	2.7	14.0	13.4	0.6	25.8	24.6	1.2
町田	36.2	41.0	-4.8	34.8	41.0	-6.2	18.8	18.6	0.2	32.2	26.8	5.4
川崎F	33.7	37.2	-3.5	37.3	33.7	3.7	15.3	14.6	0.8	28.3	29.6	-1.3
横浜FM	31.9	34.3	-2.5	32.5	29.1	3.4	13.6	13.1	0.5	25.2	19.2	6.0
横浜FC	42.3	42.2	0.1	47.1	44.4	2.7	15.5	13.8	1.7	36.5	32.2	4.3
湘南	30.1	37.8	-7.7	34.9	38.1	-3.2	14.1	14.5	-0.3	28.1	27.0	1.1
新潟	32.2	34.2	-2.0	37.6	39.3	-1.7	13.2	12.5	0.7	28.2	20.8	7.4
清水	36.5	35.2	1.3	34.6	38.5	-4.0	12.9	15.3	-2.4	25.3	23.1	2.2
名古屋	41.3	38.3	3.0	41.3	35.7	5.6	15.4	13.6	1.7	28.5	31.9	-3.4
京都	42.9	43.7	-0.9	37.5	39.4	-1.9	15.3	14.9	0.4	31.8	32.6	-0.8
G大阪	41.0	38.5	2.5	37.2	35.1	2.1	12.5	14.7	-2.2	31.5	29.9	1.6
C大阪	34.2	40.6	-6.4	39.8	34.7	5.1	13.2	13.8	-0.5	19.2	27.5	-8.3
神戸	44.2	40.5	3.7	40.5	41.1	-0.6	14.6	17.0	-2.4	26.0	28.1	-2.1
岡山	42.3	35.6	6.7	43.9	37.4	6.5	15.5	15.0	0.4	29.8	26.8	3.0
広島	38.7	37.9	0.8	39.8	41.6	-1.7	14.2	11.6	2.6	35.4	33.4	1.9
福岡	40.5	40.0	0.5	48.4	42.4	6.0	14.8	14.4	0.5	27.9	36.1	-8.2

※ 2024シーズン、2025シーズンともに第19節終了時点のデータ

▶ チーム別のセットプレーリスタート時間の昨年比を見ると、柏レイソルがすべてのセットプレーにおいて時間が短くなっている。柏レイソルはコーナーキックとゴールキックで最も短く、コーナーキックにかかる時間は、リーグで唯一20秒台となった。

Q1からの変化を見ると、セレッソ大阪のフリーキックのリスタート時間が39.0秒から34.2秒と4.8秒短くなった。さらにゴールキックも2.0秒短くなっており、柏レイソルとともに20秒を切る早さでリスタートしている。



● 各リーグの1試合平均得点数

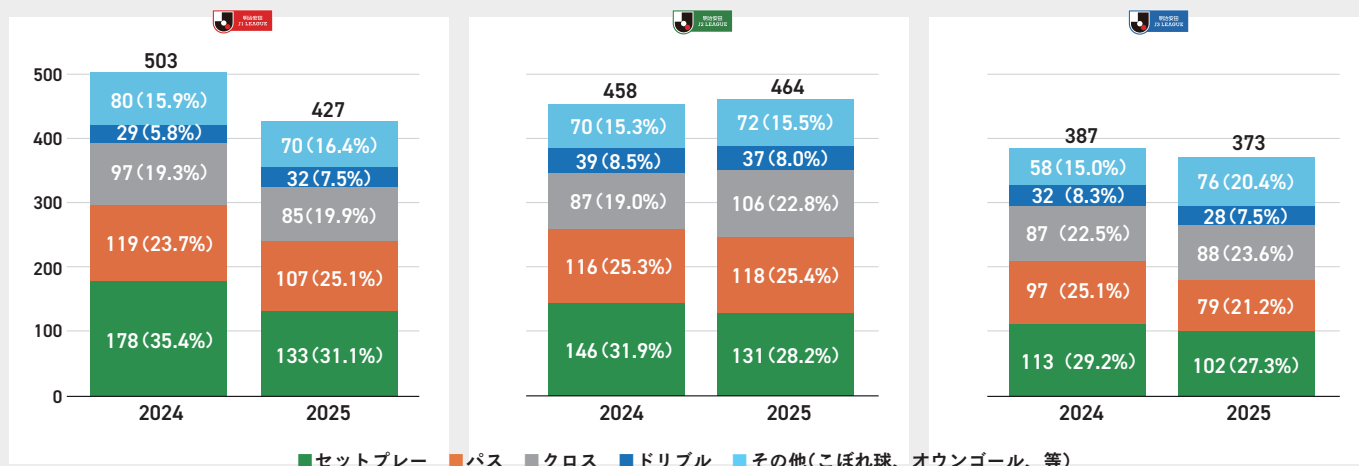
シーズン	J 1	J 2	J 3	イングランド プレミアリーグ	スペイン ラ・リーガ	ドイツ ブンデスリーガ	イタリア セリエ A	フランス リーグ・アン
2025 ※欧州リーグ:2024-2025	2.28	2.44	2.33	2.93	2.62	3.13	2.56	2.98
2024 ※欧州リーグ:2023-2024	2.67	2.49	2.59	3.28	2.64	3.22	2.61	2.70

※ Jリーグの2024シーズンはシーズン終了時点、2025シーズンはJ 1とJ 2が第19節、J 3が第16節終了時点のデータ

※ 欧州リーグは2023-24シーズン、2024-25シーズンともにシーズン終了時点のデータ

▶ 1試合平均得点数について2024シーズンと比較すると、J 1・J 2・J 3すべてで減少する結果となった。Q1（第9節まで）よりは増えているものの、欧州5大リーグと比較すると、Jリーグ全体で得点数が少ない傾向にあることがわかる。2024-25シーズンのプレミアリーグ、ブンデスリーガ、リーグ・アンでは約3点を記録しており、他のリーグよりも得点数の多いリーグとなっている。

● 各リーグの得点パターンの昨年比



※ 2024シーズン、2025シーズンともにJ 1とJ 2は第19節、J 3は第16節終了時点のデータ (2024シーズンはJ 1:190試合、J 2:190試合、J 3:160試合、2025シーズンはJ 1:187試合、J 2:190試合、J 3:160試合)

▶ 続いて得点パターンについて2024シーズンの同時期と比較すると、セットプレーからの得点数と比率が、すべてのリーグで減少している。特にJ 1ではマイナス45点と大きく減っている。2024シーズンで最も得点源となっていたセットプレーからの得点数の減少が、リーグ全体の得点数減に大きく影響していることがわかる。J 1では、ドリブルからの得点以外はすべての項目で減少する結果となった。

● J 1 得点数減少の要因

シーズン	1試合平均シュート数	シュート成功率	1試合平均ゴール期待値	ゴール方向5m未満に相手FPがいない状況	
				1試合平均シュート数	シュート成功率
2025	22.2本	9.1%	2.02点	2.9本	8.4%
2024	24.9本	9.3%	2.31点	3.6本	10.5%

※ 2024シーズン、2025シーズンともに第19節終了時点のデータ ※両チーム合計の数値 ※すべてオープンプレーからのシュートが対象

1. シュート数の減少

▶ オープンプレーからのシュート数が昨年比でマイナス2.7本と減少している。シュート数が少ない要因の1つとして、各チームが前進するのに苦労していることが挙げられる。ディフェンシブサイドから始まった攻撃が前進したエリアで終わった割合は昨年より減少 (2024:52.3%、2025:49.9%) しており、ミドルサイドから始まった攻撃が後退したエリアで終わった割合は増加 (2024:9.3%、2025:10.7%) している。

2. ゴール期待値の減少

▶ シュート数の減少に加えて、ゴール期待値も減少している。特に、ゴール方向5m未満に相手のフィールドプレーヤーがいないという「良いシチュエーション」下におけるオープンプレーからのシュート数が昨年比マイナス0.7本、シュート成功率がマイナス2.1%となっており、崩し切れていないだけでなく、崩し切っても得点を決め切れていないことが見て取れる。

3. セットプレーからの得点数の減少

▶ PK数、CK数、アタッキングサードでのFK数がいずれも昨年比で減少している。さらに、アタッキングサードのセットプレーから5プレー以内のシュート率 (2024:26.1%、2025:24.5%)、得点率 (2024:3.1%、2025:2.7%) とも低下する結果となっている。

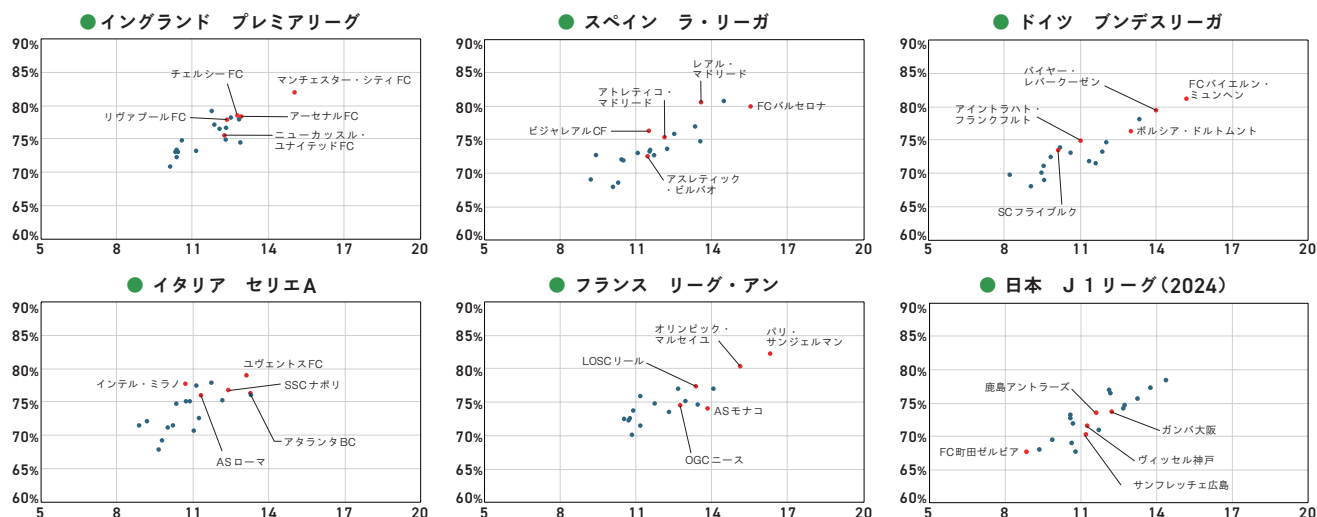


SPECIAL 世界トップ水準との比較

世界トップ水準との比較を行うため、プレミアリーグ（イングランド）、ラ・リーガ（スペイン）、ブンデスリーガ（ドイツ）、セリエA（イタリア）、リーグ・アン（フランス）とJ1のデータを見ていく。欧州リーグとデータの定義をそろえるため、J1のデータも外部ソース（データ提供：SkillCorner）を利用している。

● 各リーグのハイプレッシャー受け数とボール保持継続率

※1試合1選手平均 ※：上位5チーム



※横軸：ハイプレッシャー受け数 ※縦軸：被ハイプレッシャー時のボール保持継続率

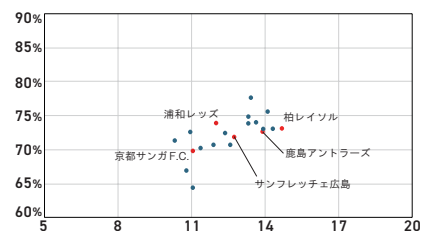
※J1リーグの2024シーズンはシーズン終了時点、2025シーズンは第19節終了時点、欧州リーグは2024-25シーズン終了時点のデータ

▶ チーム別のハイプレッシャー受け数とボール保持継続率について見ると、2025シーズンのJ1は2024シーズンよりもハイプレッシャー受け数が増加し、被ハイプレッシャー時のボール保持継続率は減少しており、よりバラツキの少ない傾向となっていることがわかる。

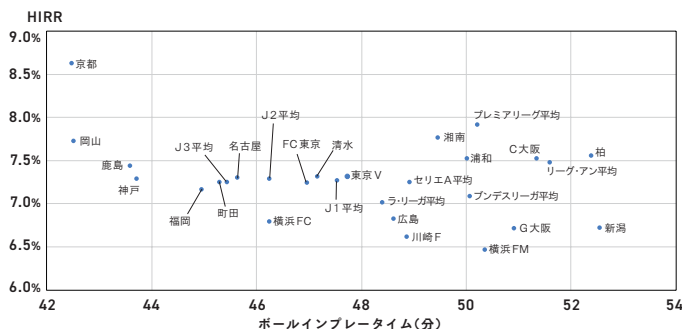
欧州5大リーグと比較すると、J1のハイプレッシャー受け数はやや多い傾向となっている一方で、被ハイプレッシャー時のボール保持継続率では、全体的に低い結果となった。欧州5大リーグの優勝チームはいずれも75%以上を記録している。J1リーグでここまで75%以上を記録しているのは、川崎フロンターレ（77.5%）とセレッソ大阪（75.6%）の2チームとなっている。



● 日本 J1リーグ(2025)



● チーム別の平均HIRRとボールインプレータイム



※HIRR (High Intensity Running Ratio)：フィールドプレーヤーの走行距離のうち時速20km以上の割合
※ボールインプレータイム：ボールがインプレーとなっている時間(SkillCorner定義)
※J1とJ2は第19節、J3は第16節終了時点のデータ、欧州リーグは2024-25シーズン終了時点のデータ

▶ HIRRとボールインプレータイムの関係性を見ると、全体的に右肩下がりになっており、HIRRが高いほどボールインプレータイムが短くなる傾向にあることがわかる。Q1（第9節まで）と同じく、HIRRが最も高い京都サンガF.C.のボールインプレータイムが最も短く、ファジアーノ岡山が続いている。

欧州5大リーグと比較すると、J1はボールインプレータイムが最も短い、HIRRではプレミアリーグ、リーグ・アンに次ぐ高さとなっている。プレミアリーグはHIRR、ボールインプレータイムともに高くなっており、J1では湘南ベルマーレが近い値を記録している。